Armanoids

心眼の虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｒｍａｎｏｉｄｓ

【Ｎコード】
Ｎ４７２８Ｚ

【作者名】
心眼の虎

【あらすじ】
数年前、古代人が作り出した人型兵器（通称アーマノイド）は突然地表から発掘された。それに搭載されているエンジン部分のオーパーツにはエネルギーを無期限に供給できるオーバーテクノロジーが使われ、その技術は人類の文化をさらに向上させた。
だが、しかしそのテクノロジーを軍事利用し、ビジリオンと言う反政府国家が世界に宣戦布告した。そしてビジリオンに対抗すべく各国は最初に発掘されたアーマノイドの技術を解析し、そのレプリカを作った。

この話はアーマノイドを駆り、ある目的のために戦場で戦う青年の物語である。

戦場の狩人（前書き）

この物語の設定は一応今から数年後の話ですw

戦場の狩人

「くそっ、奴らに足をやられた。ザザッ―誰か・・・助けを！！」

ここは死神たちが集う戦場―

「右翼部隊、壊滅状態です！！　早く増援を―うわぁぁぁぁ！？ザザッ―」

そこで戦うのは生身の人ではなく―

「やばい、弾薬が付きそうだ・・・補給部隊はもう来ないのか？」

アーマノイドと言われる人型兵器―

「隻眼の黒虎は何をしてるんだ！？」

それの原初機と言われるものは数年前、突然地表から発掘された―

「どこかで昼寝でもしてるんじゃねえか！？」

アーマノイドの原初機と呼ばれる最初の一体は古代人の作りしオーパーツ―

「くそっ！！　森を抜けちまった！！」

そのオーバーテクノロジーを利用した動力源は無期限に稼働し、無限に力を出し続ける―

「こんな荒野じゃ敵に丸見えじゃねえか！！」

それは俺たち人間の地球温暖化現象に終止符を打ち、さらなる文化の発展を手助けした―

「くっ・・・俺たちの悪運もこれまでか・・・」

しかし―

「聞こえるかぁ、連合軍の雑魚兵隊どもぉ？」

その強大なる力は世界に新たなる危機をもたらした―

「これからは我らビジリオンの時代だ！！」

ビジリオンと名乗る反政府国家がその技術を利用し―

「全ての人間が、総統にひれ伏すのだ！！」

全世界に宣戦布告をした―

「レナ、全部隊に向けて撤退信号を出してくれ」

それを恐れた各国は連合を組み―

「ピピッ―イエス、サー」

原初機のレプリカを作り、それに対抗した―

「そろそろ俺の出番か・・・」

だが、状況は変わらず劣勢―

「ザザッ―や、やられる！！」

その理由はアーマノイドを上手く操れるものが居ないから―

ただ数名を除いて。

バシュッ！！

高性能ライフルの鋭い発砲音が聞こえると同時に、スコープに映し出されていた敵機の右足が爆発し、バランスを崩した敵機は倒れて動かなくなる。

「ピピッ―右臀部に命中、敵機行動不能。次、１０時方向に敵機有り」

「了解」

バシュッ！！

また発砲音が聞こえると同時に敵機の頭部が爆発する。

「ピピッ―頭部に命中、敵機行動不能。敵残機無しです」

「ミッションコンプリート、直ちに帰還する。あと回収部隊をこっちへ回してくれ」

「ピピッ―了解」

俺はナビゲーターとの通信を切り、基地のある方向へアーマノイドを少しふらつかせながら歩かせる。

「帰ったらまた歩行の練習でもしよう・・・」

そうつぶやきながら。

「ピピッ―黒武、固定具に固定完了、もう降りても大丈夫です。お疲れ様でした」
「ああ、レナもお疲れ。整備の奴らにすぐにこいつを使えるように言ってくれ」
「今日も訓練ですか？」
「ああ、いくらこいつが後方狙撃型だからって素早い移動が出来なきゃただの固定砲台だしな」
「確かにそうですね。では整備隊に言っておきます」
「それとあとで差し入れでも持っていくよ」
「それではいつものアイスお願いしますっ！！」
「分かったよ、それじゃ通信切るぞ」
全く、アイスのことになると本当にあいつは見境がなくなるな。
まぁそこが可愛いとこでもあるけど。
「早くコクピットを開けやがれっ！！」
「すまない、今出るよ」
カチューシャを付けた整備部のやつにそう怒鳴られたので、コックピットのハッチを開ける。
「ったく、さっさと整備したいんだから早く出てくれねぇかい？」
「すまない、レナと話をしてたものでな」
「全く、お熱いことで」
「俺とレナはそんな関係じゃねぇよ」
俺はそう言ってヘルメットを脱ぐと、着替えるために更衣室へと向かった。

連合軍の制服に着替えた俺はレナへの差し入れを買いに購買部へと足を運んだ。
「すいません、いつもの二十個もらえますか？」
「はいよ、彼女への差し入れかい？」
購買の店員（通称：おばちゃん）はそう言いながらカップのアイ

スを保冷箱へと入れていく。
「彼女じゃなくてナビゲーターですよ」
「でも普通のアーマノイド乗り達はナビゲーターなんかに差し入れなんてしないけどねぇ」
そう、普通のパイロット達にとってナビゲーターはただ敵機を教えてくれる道具としか思ってない奴は少なくない。
でも俺はレナのことをただの道具で片づけずに、信頼のできるパートナーだと思っている。
それだけ俺にとっては大切な存在だと言うことだ。
「はいよ、それじゃあナビゲーターちゃんによろしく言っててね」
「分かりました、では代金はここに置いておきますね」
俺は財布からから代金をお金を入れるトレーに入れ、おばちゃんからアイスの入った箱を受け取ると、ナビゲーター達が住む専用棟へと歩き出した。
「彼女か・・・レナは他人にはそう見えてしまうものなのかな」
そんなことをつぶやいていると目的地のナビゲーター専用住居棟にたどり着いた。
だがナビゲーターの部屋に入るには、まず許可をもらわなければならない。
と言うわけで、俺は専用棟を入ってすぐ横の管理人室へと入る。
「失礼します」
「あら、隻眼の黒虎くんじゃないの」
ドアをくぐった先に居たのはこの棟の管理人さん、名前は知らないが一応顔見知りだ。
「あの・・・二つ名で呼ぶのいい加減にやめてもらえます？」
初めて会った時も何故か二つ名で呼ばれた。
他の人には階級で呼んでいるのに。
「いいじゃないの、その階級で二つ名なんてそうそう付くものじゃないわよ？」
俺の現在の階級は軍曹で、戦場には今日を含めて３００回以上は

出ている。
　確かにこれだけの実績で二つ名が付くことはほとんどないが、俺の場合は二つ名は訓練所時代から付けられている二つ名であるため、そこまですごいわけじゃない。
「それで、レナはどこにいるんですか？」
「あの子は今は自室で休憩してるわ」
「そうですか、ありがとうございます」
「そ・れ・と」
　管理人さんはそう言って俺の耳元へと顔を近づけこうささやいた。
「うちの子に手ぇ出したら・・・分かってるわよね？」
　それとこの人・・・元レディースの総長やってたらしいです。
「分かってますよ。今日だってアイスを差し入れに行くだけですから」
「それならよし」
　これで何回目だろうなぁ・・・。
　俺はここに来るたびにこれをやられる。
・・・でも管理人さんのあれだけは慣れない、戦場でのアーマノイド酔いは一秒で治ったのにな。
　そしてレナの部屋の前に付いた俺はインターホンを鳴らす。
「いらっしゃいませ、今ドアを開けますので少々お待ちを」

ガチャ

　扉を開けて出てきたのは、髪をポニーテールでまとめている身長１５０?くらいの華奢な女の子。
　そう、この子がレナ。本名≪玲奈・ミシュデルト・バロバ≫。
　日本人の父と、ロシア人の母が両親のハーフの女の子なので、顔は日本人なのに真っ白な白銀の髪の毛を持っている。
　ナビゲーターとしての腕は超一流だが、人の常識が欠如しているのと、感情をあまり表へ出さないので周りの人からは『笑わない女

神』と言う二つ名で呼ばれている。
「どうぞおくつろぎ下しませ」
「そんなにかしこまらなくてもいいぞ。俺たちは友達じゃないか」
「・・・はい」
その時レナが少し微笑んだ気がした。
もしかしたら気のせいだったかもしれない。
だがそれは俺が見たことのある微笑みの中で二番目に可愛かった・・・かな。
「これ、差し入れだ」
「あ、アイスですかっ！？」
「ああ、そうだ」
「いつもすみませんです！！」
「まぁ気にするな」
そう言ってアイスを渡しリビング前のドアへを開けようとすると、レナに前を遮られた。
「あの、客人に対しては失礼だと思いますが・・・少々ここでお待ちして貰えませんでしょうか？」
「片づけなら手伝うけど？」
「いえあの、お洗濯物をたたんでいる途中でしたので・・・下着とかも・・・」
「え、あ・・・すまない」
「いえ、私も貴方が来るのが分かっていながら・・・」
・・・なんか気まずくなったな。
ああ、もぉ何で俺はこうもデリカシーがないんだよ！！
こんなんだから友達がレナしか居ないんだよなぁ・・・はぁ。
「あの、もう入ってもよろしいですよ」
「それじゃあ、お邪魔します」
リビングには可愛いぬいぐるみやクッションなど、普段のレナの様子じゃ想像もつかないものが置かれている。
この秘密は、連合軍の中でもただ俺だけが知っている最高機密級

のレナの秘密だ。
「あ、あの・・・今日はどうするのですか？」
「そうだな、整備部の連中から連絡が来るまでここでのんびりさせてもらうよ」
そう言って俺は床に腰を下ろしてくつろぎ始めた。
「このような物しかお出しできませんが・・・すみません」
レナはそう言いながら机の上に冷たいお茶の入ったコップを置く。
「いやいや、十分だよ」
俺はそう言って少しお茶を飲む。
今の時代、世界各地で戦争をしているのによく茶葉なんて手に入れれるものだ。
「緑茶か・・・」
「確かこのお茶は貴方の祖国の物でしたね」
「ああ、すごく懐かしいよ」
そう言えば・・・アーマノイド訓練生の時によくあいつと緑茶を飲みながら煎餅食べたっけな。
確か今は本部のエリート部隊でやってるって、この前メールで送られてきたな。
「あいつも頑張ってんのかなぁ・・・」
「あいつ・・・？」
「ああ、訓練生の時にいた俺のパートナーさ」
「貴方の昔話に私、かなり興味があります！！」
「そう言えば言ったことなかったっけな」
「はいっ！！」
「そうだな・・・あれは夏の事だったかな」

≪アーマノイドパイロット教育訓練学校日本支部≫

そこは名の通りアーマノイドのパイロットを育成する場所。

教育訓練学校などと言ってもただの学校と何の変りもなく、成績は単位で決められる。
ただ一つ違うのはその単位を取るには訓練や座学に出れなければならないと言うことだ。
俺は訓練施設にあるカフェで、単位を取るための訓練をノートパソコンで探していた。
訓練と言ってもただの訓練ではなく、特別な訓練生のみが行える実戦投入型の訓練（通称：任務）を探していた。
すると━
「貴方、確か誰ともチームに入ってなかったわよね？」
「え・・・？」
その時、初めてここの教員以外の人に話しかけられた。
「もう一度聞くけど、貴方は誰ともチームを組んでないわよね？」
「ああ、だが組んでいないんじゃなくて、組みたくないんだ」
「貴方の狙撃に私の接近戦があれば無敵なのに、もったいないわね」
そう言う彼女を俺は軽く無視し、最も敵機数が多い任務を受注した。
「ちょっと貴方、聞いているの！？」
「すまない、あと３０分後に任務があるんだ」
そう言い残してノートパソコンを折りたたむと、足早に格納庫へと歩いて俺の専用機≪黒武≫へと飛び乗る。
この空間、この匂い、この座り心地は何故だか心が落ち着く。
「俺の居場所はどこでもないここだけだ・・・」
あの事件以来俺の居場所はここだけ。
そして俺はたった一人。
あの日から・・・そしてこれからも・・・。
「時間か・・・」
気が付くと任務へと行く時間になっていた。
「指令室、こちら黒武」
「こちら司令塔、そちらの任務内容は知らされている。ハッチ解放、

開け」
司令塔の教員がそう言うと前方にある格納庫のハッチが開いていく。
「黒武、出撃します！！」
そう言って戦地へと移動しようとしたとき━
「ちょっと待ったぁ！！」
スピーカーから耳がキーンとなるような声が響いたかと思うと、黒武の隣には黒武とは真逆の色の白いアーマノイドが居た。
「私もその任務受けてるから一緒に行かない？」
「断る」
そう叩き斬ると、白いアーマノイドを置いて黒武を戦地へと歩かせる。
「ちょっと待てって言ってるでしょ！！」
「何だ？」
白いアーマノイドは俺を追いかけて来る。
「だーかーらー、待てって言ってるでしょ！！」
そう言うと白いアーマノイドは黒武の肩をつかむ。
「やっ、やめろ！！」
「何でよっ！！」
「それ以上肩をつか━」
ドォォン！！
俺が全てを言い切る前に黒武は豪快に地面へと倒れてしまう。
「こいつはバランサーが狂ってて歩くのもやっとなんだよ！！」
「ご、ごめん」
俺は黒武を起こすために一度機体をうつ伏せにさせ、ゆっくりとバランスを取りながら立ち上がる。
「貴方、器用ね・・・」
「何万回もこけてたら起き上がるコツぐらいはつかめるさ」
「それなら他のに乗り換えればいいのに」
「こいつに乗らなきゃ意味がないんだ・・・」

「意味？」
「俺には普通の軍人とは違う目的のために戦っている」
「その目的って？」
「・・・それは」
少し言おうか迷ったが、俺は言うことにした。
誰に何を言われようが関係ない。
俺はただ奴を破壊するためだけにここに居る。
「━復讐だ」

今から3年もの前の話だ、今はとても懐かしく感じる。
「貴方は復讐のために戦っていたのですね」
「ああ、お前にはいずれ理由を話すから・・・すまないがそれまでは聞かないでくれ」
「了解しました」
「さて、俺はもうそろそろ格納庫に行くとするよ」
「それでは私はここで待機していますので」
「分かった、それじゃあ・・・行ってくる」
「はい、行ってらっしゃいませ」
レナに見送られながら上機嫌で格納庫へと歩いて行く。
でもそんな俺の頭の中にひとかけらの古い記憶が横切る。
「復讐の理由か・・・」
その欠片に映りこんだのは紅いアーマノイド。
「俺はお前のことをはっきりと覚えている」
そいつは炎で赤く染まった空の上でこちらを見つづけ、そして何処かへと飛び去ってしまう。
「━お前は黒武(俺)のことを覚えてるか？」
そう言いながら格納庫へと歩いて行く。

紅いアーマノイドを破壊する練習をするために。

続く

戦場の狩人（後書き）

そも、まだ他の小説が書きかけなのにこれを書いてしまった心眼です。
前々から戦争を主題にした小説を書こうとはしてたんですけど・・・。
まさか人型兵器を使うとは・・・。
誕生秘話ってやつをぶっちゃけると、これのイメージが沸いたのはパワードールって言うゲームのｗｅｂゲー版をしてた時なんですよねｗ
どういうストーリーかは知りませんが、そのｗｅｂゲーをしている時に戦争×人型兵器＋俺＝なんかすごい小説できんじゃね？　って思えてきまして・・・。

そしたらこうなってた（過去形）

一応原作は俺ですよ。
ストーリーが思いついたのはパワードールのおかげですけど。
でも世界感や兵器名とかは自分で考えましたよ？
頑張りましたよ？

だからこれは俺のオリジナルだ！！（宣言乙ｗｗ）

それと、この小説には俺の大好きなファンタジー要素が入れれないのがちょっと痛いですねｗ
初めての戦争系小説・・・・。
とりあえずやる気出して書いて行こう。
他の小説も書きながらですけどねｗｗ
では次回会いましょうノシ

黒と白の交わり

ズシン、ズシンー

ここはアーマノイド特別訓練棟の中にある特殊地形歩行訓練所。

全世界の様々な地形での戦闘を有利に行うために歩行、および回避の訓練をするための施設。

そして大体は戦場に出る前の兵士か、数回程度しか戦場に出てない兵士しかいない。

要するに俺は場違いなのである。

「すいません、今日もお世話になりました」

俺は目の前のこの施設の管理官に礼を言う。

「別に気にしなくてもいいわよ」

この管理官にはかなりお世話になっており、俺のために俺専用の訓練設備を整えたりしてくれた人だ。

「でもあなたもよくバランサーの狂った機体に乗れるわね、普通の人なら機体を立てさせることもできないわよ？」

「こいつと俺は一心同体、出来ないことなんて何もないんですよ」

そう言うと俺は黒武に飛び乗り、出口へと歩かせる。

外にでると辺りはもう真っ暗になっており、時計を見ると１１時を過ぎていた。

「またやっちまった・・・食堂空いてるかな？」

練習に熱が入るとどうも時間を忘れてしまう。

「俺の悪い癖だな・・・」

そうつぶやいて格納庫へと戻ろうとすると、レナから通信が入った。

「ピピッ━やはり黒武に乗っていましたか」
「何か用か？」
「エマージェンシーです、今すぐにここから北西２００？で交戦中の味方軍を援護して下さい」
「そうか、なら整備部にＰＳＧ１ライフルの用意をするように言ってくれ」
「ＰＳＧ１ならもうすでに用意できています、それと強襲用ブースターの換装も整備部に伝えています」
「流石だな」
俺は急いで格納庫へと向かい、装備の換装を開始する━

数十秒すると、黒武の背中と足に強襲用ブースターが換装される。
「よっしゃ、行ってこい！！」
カチューシャを付けた整備部はそう言って機体から離れていく。
「黒武出る！！」
ドフゥゥゥゥゥゥゥゥ！！
換装したブースターに点火し、開いたままのハッチから勢いよく飛び出す。
強襲用ブースターの推進力は通常の数倍はあり、Ｇもかなり強い。
だが、味方の命がかかってる。
そんなこと気にしてられない。
「もっとだ」
俺はブースターのパワーを一段階上げる。
「もっと・・・」
さらにパワーを一段階上げる。
「もっと・・・もっとだ！！」
ブースターのパワーをもう一段階上げる。
「ピピッ━それ以上パワーを上げたら機体が持ちません！！」
「そうか、ならこのスピードを維持するだけだ」

俺はそう言うと加速したままの状態で地平線を目指し続ける。
バランスって言うのは不思議なもので、加速すればするほど安定する。
だから強襲用ブースターを使っているこの時だけはバランスのことを気にしなくて良いから結構助かる。
「ピピッ┃間もなくＰＳＧ１の狙撃可能範囲になります」
「ああ、敵なら見えている」
加速しながら銃を構えてスコープを覗くと、敵機と交戦している白い味方機が見えた。
白いアーマノイド・・・まさかあいつが？
もしあいつなら・・・賭けてみる価値はあるな。
俺は遥か上を目指して空高く飛ぶ。
「狙い・・・撃つ！！」
ブースターの加速を止めると真下に居る敵機に狙いを定め、引き金を引く。
ドシュッ！！
撃った瞬間に狙いを変え、連射する。
ドシュッ！！　ドシュッ！！
「ピピッ┃３機戦闘不能」
「背部換装パーツ、パージ」
「ピピッ┃パージ！？」
黒武に換装されている背部ブースターを切り離す。
「何をしてい┃」
俺は無言で通信スイッチをＯＦＦに切り替え、レナとの通信を切る。
そして俺はＰＧＳ１を背中に装備すると、重力に身を任せる。
自重を支える推進力をなくした機体はものすごい速度で落ちていく──落ちてから数秒して地面が見えてきた。
「ブースター噴射っ！！」
俺はそう言うと燃料のある限りブースターを噴射する。

「しゃがめっ！！」
地面に着地するなり、白い機体のパイロットにそう叫んで両腰に装備しているマシンガンを抜き、回る様に銃を乱射する。
ダダダダダダダダダダダッ！！
マシンガンの弾が切れ、周りが硝煙に包まれる。
下を見ると、そこに居たはずの白い機体の姿は無い。
「やっぱり・・・あいつか」
ジャキン！！
そう言った瞬間に、鉄を切る鈍い音がすぐそばでする。
しばらくして硝煙が晴れると、そこには無数の手足が無い敵機が転がっていた。
「援護感謝します・・・って、なんだ貴方だったの」
「久しぶりだな」
「ええ、ざっと一年ぶりね」
そう、こいつが訓練学校時代のパートナーだった白いアーマノイド乗り。
名前は白瀬（しらせ）　美加（みか）、こいつが今乗っているこいつ専用の白いアーマノイドの名は白麗。出身地は俺と同じ日本の大和撫子だ。
「とりあえず感動の再会は後だ、まずはこいつらを倒すぞ」
「了解よ」
「遅れるなよ、相棒？」
「貴方こそね」
そう俺たちは言葉を交わすとミカはグラディウス・ブレードと言う剣を抜き、俺はマシンガンの弾倉をリロードし、さっき切った通信スイッチをＯＮにする。
「ピピッ―聞こえますか！？　応答してください！！」
「聞こえてるよ」
「何かあったのですか！？」
「いや、俺が故意的に通信スイッチを切っただけだ」
「そうですか」

「怒らないのか？」
「貴方がしたことはすべて正しいと私は思っていますので」
「もしお前や仲間を裏切るようなことをしてもか？」
「はい、私は貴方を信じます」
信じるか・・・。
「ねぇ、私をほったらかしにしないでくれる？」
「すまない、忘れていた」
「ちょっと！？　数年ぶりに再会したのにそれはないでしょ！？」
「うるさいちょっと黙ってろ」
「・・・はい」
俺が命令口調で言うと美加は決まっていうことを聞く。
階級はあいつの方が上なのに、これじゃどっちが上官か分からないな。
「レナ、俺たちの周りにいる敵機の数を報告してくれ」
「敵機数は６です」
「そうか、なら全員を鹵獲する」
「それでは回収部隊をそちらへ向かわせます」
「ああ、頼むよ」
レナとの通信が終わると、レーダーに敵影が６機映し出される。
「結構やばいな、あれをやるか？」
「・・・・・・・」
「・・・もう喋ってもいいぞ？」
「え？　喋ってもいいの？」
「ああ、許可してやる」
そう言えば、こいつに人に命令されたら許可されるまで守るって癖があるって事を忘れていた。
昔は俺が命令したことを許可するまで、ずっと守ってたことがあったな・・・。
「さっさと片付けて帰るぞ」
「あれって舞いの事？」

「ああ、奴らに見せてやろう」
訓練所時代に俺たちが生み出した究極のタッグオフェンス、その名も―
「黒と白の舞いを―」

ここは戦場と言う名の一つの舞台―
「な、なんだこいつら、急に動きが変わりやがった！？」
剣は切るのではなく流れに乗せ―
「これってアーマノイドのする動きなのか！？」
銃弾は撃つのではなくそこに置く―
「まさかこいつら・・・黒虎と白狼！？」
そしてそれは舞いのごとく華麗な動き―
「新型のやつは何をしてるんだ！？」
それを見たものは―
「助けっ―う、うわぁぁぁぁぁ！？」
気づいたころには倒れている。
「そろそろフィニッシュ行くぞ？」
「了解っ！！」
「弾はそこに置くように・・・」
最初に俺が両足をマシンガンでつぶし、
「剣は風の流れに乗せるように・・・」
ミカが両腕を切り取る。
「「そして、拳には魂を乗せる！！」」
トドメに敵の頭を黒武と白麗の二つの拳が貫き、敵機はその場に崩れるように倒れる。
「腕は衰えてないようだな」
「貴方こそね」
そう言っていると、遠くから回収部隊がこっちへ真っ直ぐと向かってくるのがモニターに映る。

「回収部隊の奴らも来たみたいだし、昔みたいに一緒に帰るか」
「基地からここへは２００?もあるのよ?」
「それくらいじゃお前に話したいことを全部話せないかな・・・」
「私からも貴方に話したいことが山ほどあるのよ?」
「それなら急いで帰ってゆっくり話すか」
「ええ、それがいいわね」
俺とミカは基地のある方へと機体を走らせる。
ふと東を見ると、地平線には少し太陽が顔を出していた。

黒と白の交わり（後書き）

はぁ・・・疲れた。
ども、心眼です。
結構バトルシーンってめんどくさいですね・・・
話すこととか特にないので、みなさんさようならノ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4728z/

Armanoids

2011年12月29日22時52分発行